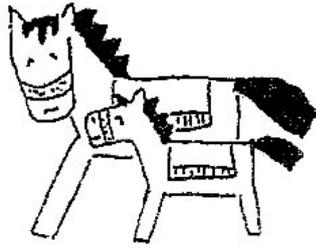


お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと

令和3年 3月 No.316



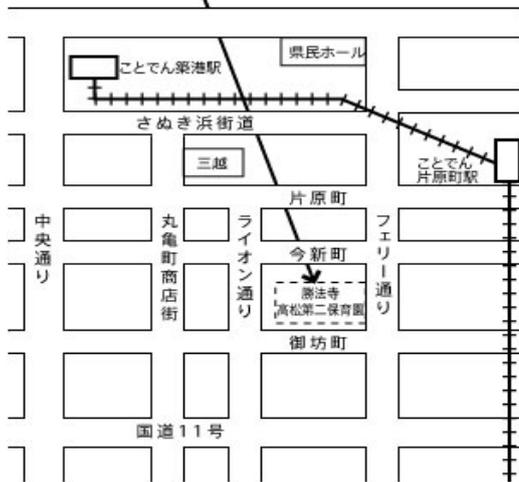
〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松第二保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		3月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
3月 4日 25日	木	こうさぎおはなし会 15:30～16:30	低年齢のお子様向けのおはなしや 手あそびをしますので、どなたでもどうぞ。
3月 12日 26日	金	うたうたい「カラヴィンカ」 19:00～20:30	声が出やすいよう柔軟体操もして 新しい唄を練習します。
3月 6日 27日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のお子さまと園庭や お部屋であそびましょう。
3月 18日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	2月お休みでしたので、お好きの絵本を 読んで、フリートークします。
3月 27日	土	絵本と小物づくり 14:00～16:00	不織布で青むしを作ります。 子育てにお役立てください。

<p>・火～土の9:00～18:00までは、園内開放していますので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)</p>	<p>育児相談(月～土) 9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活 入園・見学についての相談もどうぞ。</p>
--	--

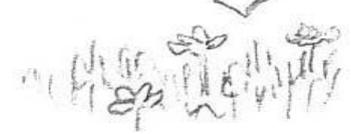
香川県高松市御坊町2-2  
地域子育て支援センター



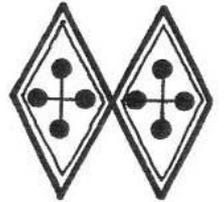
金子みすゞ童話全集3  
「空のかあさま・上」より

春のくるまだ、ついてゆこ。  
野原へ散ってげんげ草、  
畠へおちて、菜の花に。  
町をはなれりや、降るピラは、  
ピラ撒き自動車、ついてゆこ。  
ピラ撒き自動車、やって来た。  
もっと拾おう、赤いピラ、  
ピラを拾おう、黄のピラ、  
ピラ撒(ま)き自動車が出来た。  
ちゃんちゃか楽隊のせて来た。

ピラまき自動車



☆今月の内容 ・「子どもは授かるもの?作るもの?」「人間に重要なのは素質か?環境か?」  
・「絶対に愛され許された」という記憶



## 子どもは授かるもの？作るもの？

長崎大学名誉教授 篠原 駿一郎

私は学生たちに聞くことがあります。「君たちの命は誰からもらったの？」  
たいてい、彼等はこう答えます。「両親からです。」

私は言います。「間違いではないけどね。両親だって、愛し合っただけだろう？人間には、命を作ることなんてできないんじゃないかな。」

そして「いずれにしても、人間の命は、何か大きな力から、神でも天でもいいけど、授かったのじゃないだろうか。」と言います。

現代では、子どもが授からなければ、神仏に頼るのではなく、産婦人科を訪ねます。そこでは、様々な技術で子作りの手助けをしてくれます。人口授精、体外受精、代理出産、等々。精子と卵子と子宮があれば子どもはできるということで、その三者の組み合わせは2の3乗、8つの可能性があります。

精子や卵子の提供を受けるときに良さそうなものを選んだり、提供者のカタログを見て選んで買うことができる国もあります。

こうして、人々は、次第に、子どもは「授かるもの」というよりは「作るもの」という感覚になっていきます。

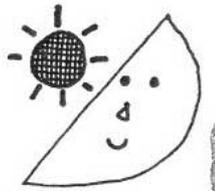
これには、戦後、産児制限の思想が持ち込まれ、避妊の方法が発達し、人々が、子作りは自然任せではなく意識して行うものだという考えが広まったこともあるでしょう。「そろそろ子どもを作ろうか？」という夫婦の会話も生まれます。

もちろん、私は、生殖補助技術が全面的に悪いとも、避妊するのは邪道だとも考えません。しかしそれが、あまりにも恣意的になりすぎ、子どもは作るものである、と考えるようになれば、ちょっと危険です。

それは、「子どもは親の所有物である」という意識を産み、胎児に障害があれば中絶し、生まれた子どもが気に入らなければ虐待するという行為につながっていきます。

生殖に関わる技術はもっと進むでしょう。しかしそれでも、男女が出合い、愛し合い、子どもを授かる、そしてその子は、親の所有物ではなく天から授かった独立した人格である、という原点を大切にすべきではないでしょうか。

## 人間に重要なのは素質か？環境か？



さて、子どもはモノづくりのようなものだと考えるのであれば、子どもの改良ということも考えたくありませんね。実は、子ども作りの方法よりも子ども改良の方が容易とも言えるのです。

人間を改良し優れたものにする方法はいろいろあります。昔から、学者たちの間では、持って生まれた素質と生まれた後の環境のどちらが重要か、という議論がなされてきました。正解は「どちらも重要だ。」です。

まず環境の方を考えてみましょう。環境というのは、政治的な、あるいは経済的な環境もあります。例えば平和で豊かな社会が望ましいですね。しかし、最も直接的な環境は広義の教育です。

私たちは生まれた瞬間から母親や家族、あるいは地域社会から教育されますし、幼稚園から始まる長い教育課程があります。また社会には、公民館、図書館、美術館、公会堂などがあります。またラジオやテレビに新聞、それに、さまざまな出版物も、ある種の教育システムですね。

そういう教育環境の中で私たちは人として社会人として成長していきます。こういうシステムなしには人として成長も社会の進歩も成熟もないでしょう。

では人間の持って生まれた素質に関してはどうでしょうか。素質は、文字通り、持って生まれた素質の質ですからどうにもならない、と考えてしまうかもしれません。

私たちは親を選ぶことはできませんし、自分がどんな素質を持って生まれてくるかはわかりません。もちろん親も子どもを選ぶことができませんし、どんな子どもが授かるかは、ほとんど予測できません。

人間自身が野生動物であるということを忘れていくようです。

人間は世界中を自由に移動し、さまざまな男女の出会いの中で子どもを産みます。ですから、野生動物である人間の遺伝子は混沌こんとんとしています。

親が意図的に子どもを作ることができないというところに、子ども一人一人の尊厳があるのです。子どもたちは親の意図とは独立な存在なのです。それぞれ異なる素質を持った命は、天から授かったものなのです。

## 「絶対に愛され許された」という記憶

玉川大学名誉教授 石橋 哲成



「義家弘介」という名前をご存知の方もおられるかと思います。義家氏は、現在は衆議院議員をされています。現在の義家氏からはとても想像できないことですが、実は彼は若き日、世間から嫌われ、家族からさえ厄介者扱いされた“札付きの不良少年”でした。

何故そうなったのでしょうか。義家氏が生まれて間もなく両親が離婚。父が再婚して、そこに腹違いの弟が生まれました。彼にとって一番不幸だったのは、「成長する時になくってはならない大切なものを欠落させたまま幼児期を送ってしまった」ということでした。「大切なもの」とは、彼によれば「親という存在に『絶対に愛され許された』という記憶」です。一般にはこの記憶が、社会の荒波の中に投げ出されても、その荒波に「立ち向かう勇気の土台」となるものです。

しかし、この記憶を持たないままに成長していった義家少年は、結局はゆがんだ形で自分を表現していくことしか出来なかったのです。この不良化した義家少年に愛の手を差し伸べたのが、北星学園余市高等学校での担任、安達俊子先生でした。

義家少年は安達先生のおかげで、「親という存在に『絶対に愛され許された』という記憶」に代わるものを、手に入れることが出来たのです。

「不良化しても、最後の一线を越える前で、立ち直れる少年に共通することが幾つかある。その中の重要な一つは、自分の存在を認めてくれる人が居ることだ。たくさん居なくてもいい。ただ一人でもいい！」という言葉が思い出されます。

生命尊重ニュース 2021年1月・2月より

